

ここで取り上げたいスタープロは四つ、三船プロ、石原プロ、勝プロそして中村プロです。現存するのは三船プロのみです。いずれの創業者である三船敏郎、石原裕次郎、勝新太郎、中村錦之助（後の萬屋錦之介）も鬼籍に入られています。

1967年~1971年の主要作品

	三船プロ	石原プロ	勝プロ	中村プロ
1967	『上意討ち』 小林正樹		『座頭市牢破り』 山本薩夫	
1968	『黒部の太陽』熊井啓	『黒部の太陽』熊井啓		『祇園祭』 山内鉄也
1969	『赤毛』岡本喜八 『風林火山』稲垣浩 『新選組』沢島忠	『栄光への5000キロ』 蔵原惟繕		
1970	『待ち伏せ』稲垣浩	『ある兵士の賭け』キース・ラーセン+白井伸明 『富士山頂』村野鐵太郎	『座頭市と用心棒』岡本喜八 『座頭市あばれ火祭り』三隅研次	『幕末』伊藤大輔
1971	『二人だけの朝』松村健	『男の世界』長谷部安春 『甦る大地』中村登	『新座頭市破れ！唐人剣』安田公義・黄銘 『顔役』勝新太郎	

『風林火山』も第1位で720百万円、同じく同年の『栄光への5000キロ』も650百万円で第1位です。（興行収入のベストテンは4月から翌年3月までを基準とするため）ほかにも『待ち伏せ』が第6位の250百万円です。1970年以降、正確な数値が発表されなくなりますが、それでも『新選組』『幕末』『富士山頂』『座頭市と用心棒』も興行的な成功を取めた作品と言えます。日本映画界の斜陽期の中にあって、スタープロの作品群は大いに気を吐いたと言えるでしょう。スター俳優自らが作りたい作品を五社協定の制限を超えて作る姿勢から感じられるのは映画本来の観客重視というスタンスであったような気がします。スター俳優ゆえに知悉した当たる映画づくりのノウハウを最大限に発揮したとも言えます。しかし、そこには陥穽もあり、結果的に見ると、活動の場をTVの世界へと変えたものの、勝プロと中村プロは1980年代初めにいずれも数十億円の負債を抱え倒産、石原プロは石原裕次郎の死後も持ち堪えたものの2021年に解散、三船プロも現存するとはいえ映画製作から遠ざかったままの状態です。

石原裕次郎が自らのプロダクションを設立したのは1963年のことで、同年に三船敏郎もプロダクションを設立しました。石原プロの第1作は、日活との提携で市川崑を招聘しての『太平洋ひとりぼっち』です。1962年の夏に、たった一人で94日間の太平洋ヨット横断旅行を成し遂げた堀江謙一青年の壮挙を映画化したもので、ヨットマンでもある石原裕次郎の面目躍如たるものがあります。和田夏十と市川崑の脚本は、ユーモアを交えながら若者の孤独や家庭環境を丁寧に描きながら、芸術性を感じさせる秀作であったものの興行的には振るいませんでした。石原裕次郎のこれまでのアクション映画や青春映画とは毛色が異なる、芸術性の高いドラマであったため、当時の大衆が求めていた裕次郎像との乖離があり、観客動員が伸び悩んだのが原因と言われます。興行とは裏腹に、作品の質は非常に高く評価されました。文部省芸術祭賞を受賞し、市川崑監督の卓越した演出や、芥川也寸志と武満徹による音楽も絶賛されたことは皮肉な結果です。一方、三船プロの第1作目は、三船敏郎自身の監督作品『五十万人の遺産』です。戦時中フィリピンのジャングルの中に7億円の金貨を埋めたことを知った男たちが、埋蔵場所を知る元陸軍将校を脅し密輸船で掘りに出かけるという冒険譚です。菊島隆三のいつもながらの骨太のストーリー展開と巧みな構成で物語は進みます。三船敏郎、仲代達矢、山崎努、三橋達也という主演はさながら黒澤作品を彷彿とさせます。当初は三船敏郎とは付き合いの深い岡本喜八が監督する予定でしたが三船自ら監督することになり、スタッフ陣も先に書いた脚本に菊島隆三、撮影に斎藤孝雄、音楽に佐藤勝など、ここでもいわゆる「黒澤組」の精鋭スタッフが脇を固めて三船の初監督を支えました。もう監督業はこりごりと三船自身が語るように、出来としては決して芳しいものではありません。これだけのキャストとスタッフを配しながらといった印象が強いものです。しかし、興行的には225百万円とその年の第6位にランクされるほどのヒット作となりました。（その年の第1位は今村昌平『にっぽん昆虫記』の330百万円でした）このように石原プロと三船プロの第1作目は明暗を分けました。石原プロの第1作が「名匠を招いて芸術性を高めた」のに対し、三船プロの第1作は「自ら監督して責任を負った」という対照的なスタートだったのが興味深いところです。

ここで、1967年公開の『上意討ち 拝領妻始末』について。前述したように『怪談』（1964年）は、興行的な失敗で「にんじんくらぶ」を倒産に追いやりました。監督した小林正樹はその後松竹を離れフリーの立場となり、以前から関係の深い脚本家の橋本忍の作品『日本のいちばん長い日』を東宝で監督することになりました。しかし、藤本真澄プロデューサーとの衝突で降板します。そして、後任には岡本喜八が登場します。橋本忍は当時『『上意討ち 拝領妻始末』も手掛けていて小林正樹が東宝本体で撮れなくなった代わりに、三船プロでの制作を提案・調整し実質的な橋渡しとなりました。この作品の原作者である滝口康彦は橋本忍脚本・小林正樹監督『切腹』（1962年）の原作者でもあります。こうして『上意討ち 拝領妻始末』が誕生します。この作品に主演した三船敏郎は、黒澤作品や東宝作品で見せる快活なアクションのキャラクターとは異なり、小林正樹が得意とする「権力に抗う孤独な個人」としての重厚でストイックな新たな一面を三船から引き出しました。この作品の意義は実に大きかったです。二人の顔合わせは残念ながらこの一本だけに終わります。